

本論考は、本学での「第二十二回国語教育研究集会第二部・講演」をもとに、実践研究としてまとめていただいたものである。

文教大学国文学会・国語教育研究集会

小学校における伝統的な言語文化の指導

筑波大学附属小学校 青山 由紀

1. はじめに

小学校で古典に触れさせる主たる目的は、「日本の言語文化に親しませるため」ことにある。学習指導要領では「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に、次のように示された。

低学年… (ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

中学年… (ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

高学年… (ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

学習指導要領に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が示される前から、行ってきた実践と、上記の指導事項を受け、「小学校における伝統的な言語文化の指導」はどのようにあるべきかについて考える。

2. 実践例

学習材の特性と指導法の工夫を中心に、実践例を紹介する。

(1) 帯単元「季節の歌」 4年生

～「文語的な言い回しに出会い、歴史的仮名遣いに慣れること」
や「季節の言葉を知ること」をねらいとした年間帯単元～

◆童謡・唱歌の学習材としての特性

古典学習の導入となる中学年では、まずは文語的な口調や言い回しに慣れさせるところから始めたい。それには、童謡・唱歌が適していると考えた。唱歌は、メロディーが言葉や文脈、内容を理解する助けとなる。また、同じ歌を両親や祖父母が知っていることから、歌い継がれてきた「文化」というものを子どもたちに感じさせることもできる。

◆単元のねらい

文語的な言い回しに出会い、歴史的仮名遣いに慣れる。

◆単元の流れ

- ブレ…「俳聖カルタ」で遊びながら五音七音のリズムや歴史的仮名遣いに慣れる
- 5月…『鯉のぼり』（2時間）
- 6月…『夏は来ぬ』（1時間）など

◆学習の実際（『鯉のぼり』）

5月、『鯉のぼり』の一番の歌詞を平仮名で板書し、ノートに一行おきに視写させた。この歌を知っている者は一人もいなかった。

まず、「漢字に直せる言葉を直してみよう」と呼びかけ、始めは辞書を使わずに考えさせた。「『青空』は『青』に付い

	3	2	1	
空	わ	物	た	鯉
に	が	ゆ	か	の
お	お	た	さ	ぼ
ど	身	か	な	り
る	に	に	な	
や	似	振	か	な
	よ	る	お	な
	や	ぬ	お	み
	や	姿	の	と
	な	あり	あ	く
鯉	男	尾	い	も
の	子	鱈	さ	の
ぼ	と	には	か	ぞ
り	き		げ	ら
			に	な
			を	み
				文
				部
				省
				唱
				歌

て『～ぞら』と音が濁っているから、『なかぞら』も『中』について『中空』なのではないか」と熟語のつくりから推測していた。

「いらか」を知らなかったので、辞書を引かせて「屋根瓦」であることを確かめさせた。「瓦」を知らない子どもには、黒板に絵を描きながら解説を加えた。絵を見て、「葺が波のようになっているんだ」「葺を波に例えているのか」と歌詞をイメージし始めた。

「先生、今描いた屋根の上の方に雲も描いて」と言う。黒板に描いた屋根の上に雲を一つ描いたところ、次のような発言が続いた。

- ・一つじゃだめ。いくつか重ねて波のように描いて。雲も波に例えているんだから。

- ・屋根と雲の「中」だから、「中空」なのか。屋根と雲の間に鯉のぼりを描くといひんだ。

各自、それぞれのイメージをノートに描き、辞書で意味調べもした。

- ・「高く泳ぐや」の「や」は、俳聖カルタの「古池や〜」にあった「や」と同じだ。

- ・七音五音の繰り返しになっている。俳句みたい。

と、俳句と関わらせた気づきから、「七五調」という日本語特有のリズムであることを教えた。平仮名だけで示したことが、七五調に気づく手立てとなった。

次に、2番、3番の歌詞を漢字を交えて示した。

- ・「舟をものまん 様見えて」とは、舟を「のむ」のか「のまないのか」。いったいどちらだろう。
- ・前後の内容から考えて、「舟をものまん」は舟を「のまない」のではなく、「のみこみそうな」や「のみこもうとしている」と考えるとよさそう。
- ・「物に動ぜぬ姿あり」と「たちまち竜になりぬべき」の「ぬ」は意味が違うのでは？
- ・前後の関係から考えて、「物に動ぜぬ」は「動じない」「慌てたりしない堂々とした態度」とう意味で「～しない」という（否定の）「ぬ」だ。でも「竜になりぬべき」の方は、「竜にならない」では話が通じなくなる。「きっと竜になる」という意味ではないか。
- ・この歌は中国の伝説がもとになっていて、竜門という名前の滝が話の舞台であったと辞書にある。これが「登竜門」という言葉の由来になっているのかな。

歌詞が学習した季節に合っていたことや、内容を理解できたこと、五七調のリズムやメロディーが心地よいことから、繰り返し口ずさんでいた。文語的な言い回しに親しむのに、童謡・唱歌を口ずさむことは有効である。また、童謡・唱歌は、イントネーションやアクセントに合ったメロディーがついていることが、内容を理解する助けとなる。

6月、『夏は来ぬ』を扱った。まず、題名だけを板書した。

- ・読み方は、夏は「きぬ」「こぬ」「くぬ」のどれだろう。夏が「来ない」ってこと？
- ・『鯉のぼり』にあった「竜になりぬべき」の「ぬ」のように、「～でない」という意味ではないんじゃない？だから、これも「夏が来

ない」という意味ではないと思う。

- ・歌詞全体を見れば、夏が「来るのか」「来ないのか」分かるよ。

歌詞から、初夏の風物を折り込んだ「夏が来た」歓びを歌ったものであることを理解した。先の子どもの言葉からも分かるように、『鯉のぼり』や俳聖カルタなど、それまでの文語的な言い回しの学習とつなげて考え、内容を理解しようとする姿が認められた。

(2) 単元「昔話を読もう」 4年生

～江戸時代の昔話の音読を聞いたり、テキストを読んだり、昔話の童謡・唱歌に触れたりしながら、話の内容をつかむを通して、古典に親しませる単元～

◆学習材について

子どもに親しみのある昔話の原典として、『竹取物語』『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『御伽草子』などが挙げられる。しかし、中古や中世の文学を子どもに与えた場合、現代と異なる言葉が多すぎて、抵抗が大きい。そこで、中学年では話の内容をよく知っている昔話、それも現代の言葉に近い江戸期のものを学習材とすることで、抵抗を減らそうと考えた。滝沢馬琴の『燕石雑誌』巻之四に集められている昔話の中から『桃太郎』『猴蟹合戦』『兎の大手柄』（かちかち山）を学習材とした。童謡や自分の知っている昔話と比べることで、これらの話を主体的に聞いたり読んだりすることをねらいとした。

単元を構想するにあたり、事前に昔話体験の調査を行った。題名を列挙した調査用紙を見て、はじめは「知ってる、知ってる」と言っていた子どもたちであったが、実際にあらすじを書かせてみると、「結末がわからない」「登場人物は言えるけど…」と、昔話を知っているようで知らなかったことに子どもたち自身が驚いていた。資料の調査は、学習指導要領に「伝統的な言語文化」が示される前の子どもたちに行ったものであるため、「因幡の白兎」を含めた神話は「知らない」が大勢を占めた。

〈資料・事前調査〉

本学級児童の昔話体験を調査した。作品毎に、「あらすじが書ける」は○、「題名は知っている」は△、「知らない」は×印をつけた。各作品の○印の割合を示す。(数字は全て%)

「桃太郎」……98	「さるかに」……65	「かちかち山」…50
「一寸法師」……35	「舌切り雀」……55	「かぐや姫」……35
「浦島太郎」……75	「花咲爺」……30	「因幡の白兔」…15
「八岐大蛇」……5	「海彦山彦」……3	「牛若丸」……0

◆単元のねらい

江戸時代の昔話の音読を聞いたり、テキストを読んだり、昔話の童謡・唱歌に触れたりしながら、話の内容をつかむことを通して、古典に親しむ。

◆単元の流れ

○第1次 昔話を読もう……5時間

- ・「桃太郎」「猴蟹合戦」「兎の大手柄」を聞いたり読んだりして、童謡や現代の話と比べる。

課外 昔話を多読する(夏休みの課題)

○第2次 昔話を語ろう……3時間

- ・語りたい江戸期の昔話を選んで音読する。

◆児童の読みの姿(意味を推察し内容を理解する読み)

- ・文脈や前後の関係から考える
- ・口語で似た言葉を探して当てはめてみる
- ・既習の知識や言語経験と照らしたり繋げたりして考える
- ・漢字の意味から考える など

◆学習の流れ(三つのステップで昔話を読ませる)

①はじめは音声だけで出せ、後から文字を示す。

②自分たちの知っている昔話との共通点や相違点を見つけながら、内容を読み取らせる。

③昔話を歌った童謡の歌詞や、各地に伝わっている昔話を示し、言語文化への興味を喚起する。

まずはじめに、「これから江戸時代に書かれた昔話を読みます。何の話かわかるかな。わかったら黙って手を挙げましょう」と呼びかけて『桃太郎』を読み聞かせた。

桃太郎

童の話に、むかし老いたる夫婦ありけり。夫はたきぎを山に折、婦は流れに沿て、衣を洗ふに、桃の実一ツ流れて来つ。携へかへりて夫に示すに、その桃おのづから破て、中に男児ありけり。この老夫婦原来子なし。この桃の中なる児を見て喜びて、これを養育み、その名を桃太郎とよぶほどに、その児たちまち大きになりつゝ、力人に勝れて、一郷に敵なし。

ある日、その母にきび団子といふもの、あまたとゝのへて給はれと言ふ。母その故を問へば、鬼ヶ島に赴きて宝を得んためなりと答ふ。父聞いて、いと勇と誉て、その言ふまゝにす。団子すでにとゝのへしかば、桃太郎これを腰間につけ、父母に辞し別れて、ゆくゆく途に犬あり、その腰間なるきび団子を見て、これ一ツ給はらば、従者たらんといふにとらしつ。又、猿と雉子とにあへり。みなきび団子を与えて従者とす。遂に鬼ヶ島に至り。

その窟を責て、鬼王を擒にす。鬼どもその敵しがたきを見て、三ツの宝物隠れ蓑、隠れ笠、打ち出の小槌を献りて、主の命乞せり。かくて桃太郎、その宝を受けて鬼王を放し、犬、猿、雉子を持て、故郷に帰り。思ふまゝに富さかへて、父母を安楽に養ひしといふ事。

『『燕石雑誌』 卷之四・曲亭馬琴 『日本隨筆大成』 第二期第19巻 吉川弘文館より』

「桃の実一つ、流れて来つ」のところまでで、全員の手が挙がった。「従者」という言葉が何度か出てきたところで、「きっと家来のことだよね」と囁く声が聞こえた。後にテキストの漢字を見て、「『従う者』って書いてあるから、やっぱり家来のことだ」と確認する姿も見られた。「三つの宝物」のくだりでは、「『打ち出の小槌』は『一寸法師』だよ」と反応を示した。

このように、自分の知っている『桃太郎』との共通点、相違点を見つけることを課題として読み進めていった。中でも子どもたちが驚いたのは「江戸時代の鬼は何も悪いことをしていない。桃太郎は宝を得るために鬼ヶ島に行ったことになっている」ことであつた。だれを読者として想定するか書き手の意図によって、昔話の書きぶりが違うことを知った。また、童謡『桃太郎』とも比べ、内容や「語り手」の違いに気づいた。

次に取り上げた『猴蟹合戦』では、登場人物、出来事、結末など物語の基本的な枠組みを意識しながら比較することができた。

(3) 単元「千年の昔の語り部」 4, 5年生

～千年以上昔の作品が身近に知っている作品であることや、内容の大体を理解することができることから、現代に繋がっていることを実感させ、古典に親しませる単元～

◆単元のねらい

- ・音読を通して古典に親しむ。
- ・歴史的仮名遣いを読むことができる。
- ・表現の工夫や語りの台本について友だちと話し合う活動を通して、自分の抱いているイメージや思いを深めることができる。
- ・古典文学のイメージが聞き手に伝わるように音声で表現する。

◆単元の流れ

第1次 聞いただけでわかるかな？

古典との出会い ～『竹取物語』～

第2次 これでも日本語？

万葉仮名との出会い ～『万葉集』～

第3次 語り部になろう 21世紀の語り部

～『平家物語』・「冒頭」「扇の的」「宇治川の先陣」～

第1次 聞いただけでわかるかな？

古典との出会い ～『竹取物語』～

◆学習材について

『竹取物語』を古典との出会いの学習材として選んだ理由は次の四つである。

- ・『かぐや姫』として、だれもが話の内容を知っている。
- ・「千年以上も昔の物語でも内容がわかる」という経験をさせる。
- ・中古の物語文学は伝承説話の流れから、もともと口伝えに語り継がれたものであるため、漢語が少なく簡単な言葉が使われている性質をもつ。音声だけでも理解しやすい。
- ・特に冒頭部分はリズムがよく、音読や暗唱に適している。

『竹取物語』以外にも、説話文学の中で上記の条件を満たす学習材を見つけることが可能であろう。

◆学習の流れ

- ①はじめは音声だけで出会わせ、後から文字を示す。
- ②『竹取物語』クイズを出す。
- ③再度、『竹取物語』を読み直してみることで、言語文化への興味を喚起する。

「今から千年以上も前に作られた物語を聞いて、どんな話か分かるかな？」とだけ子どもたちに呼びかけ、『竹取物語』を文字を見せずに、はじめから6文までを読み聞かせた。

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろずのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光るたけなむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光たり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

『竹取物語』冒頭

3文目の「その竹の中に、もと光るたけなむ一すぢありける。」まで読んだところで、「あっ、もしかしたら」「わかった」という声が起こった。結果、6文まで聞いても何の話か見当がつかない者は39名中5名であった。その後、第一部の終わりの「秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ」という名づけの部分まで読み進めたところで、全員が『竹取物語』であることに気づいた。

第一段のテキストを配布する前に、再度読み聞かせた。音声だけで古典に出会わせただけなら、現代の自分たちにも内容がわかるという驚きを持たせたかったことと、内容がわかるということは現代でも使われている言葉が多用されていることに気づかせたかったからである。実際、テキストに現代でも使われている言葉に線を引かせたところ、かなりの部分に線を引くことができた。子どもたちは「なんだ千年くらい前の物語まで、自力で読めるじゃないか」と、これも音読したい暗唱したいという意欲喚起に繋がった。

また、作者不詳の物語であることを伝えた。だれもが知っている『かぐや姫』の作者がわからないことに子どもたちは驚いた。さらに作者不詳であるにも関わらず、千年以上経った21世紀の自分たちがなぜこの物語を知っているのか考えさせたところ、複数の子どもたちが、口伝えに語り継がれた物語ではないかと言いつつ当てた。テキストには、

『日本古典文学全集 竹取物語』（小学館）の本文だけを使用した。口語訳をつけなくても充分であった。

② 第2次 これでも日本語？

万葉仮名との出会い ～『万葉集』～

「さらに、千年くらい前の物語でも読めるよ」と意気揚々の子どもたちに、「『竹取物語』から百年くらい前のものです」と『万葉集』の長歌を提示した。

漢字ばかりの学習材に、「これ、本当に日本語？」「中国語じゃないの？」と戸惑いながらも、すぐに夢中になって読み解き始めた。

しばらくすると、「上瀬爾」「下湍爾」、「雨零而」「風吹而」、「風不吹」「雨不落」の部分が対句になっていることに気づいた。また、次のような発言が見られた。

- ・橋と船という文字があるから、川に関係があると思う。
- ・「反歌」というのは返事という意味で、これは二人の手紙だと思う。
- ・返事の方に「君」という文字があるから、返事を書いたのは女の人で、はじめの手紙は男の人が書いたものなんじゃない？
- ・「不」は「～ない」という意味の字だから、「風不吹」は風が吹かない、「雨不落」は雨が降らないという意味になる。

このように、詩の技法や漢字の意味など、既習の知識を生かして内容を推測することを楽しんでいった。

- ・「久堅乃」はひさしいにかたいにのだから「ひさかたの」と読むと思う。百人一首で「ひさかたの」から始まる歌があった。当て字が多いんだ。
 - ・だったら、「登毛」は「とも」と読めばいいよ。
 - ・問題は「天漢」が何かだ。
- 学習時（7月）に関係があるというヒントを出し、「七夕の歌」で

『万葉集 卷第九』長歌 1764,1765]

天漢	霧立渡	且今日	且今日
吾待君之	船出為等霜		
反歌			
裳不令濕	不息來益常	玉橋渡須	
雨零而	風不吹登毛	風吹而	雨不落等物
上瀬爾	珠橋渡之	下湍爾	船浮居
久堅乃	天漢爾		

あることにたどり着いた。『万葉集』の索引や、インターネットを利用して、「ひさかたの」から始まる歌を探し出す子どもたちもいた。そこで次の時間には読み方や意味を確かめ、音読や暗唱をした。さらに、仮名文字の始まりへの興味が高まったのでそれに関する資料も提示し、簡単に紹介した。学級全体で話し合いながら推察したことが、学習を楽しむことに繋がった。

そのときの驚きのある児童は、次のように記した。

「あて字が多くて、『えー、ちがうよ』と思ったのも意外に当たってたりしたので驚き！『天漢』を『あまのがわ』とは読めない。今は平仮名があるけれど、昔は中国語のように、漢字のみで日本語が成り立っていたのにはびっくりした。」

本実践では、長歌を扱ったが、万葉仮名で書かれた短歌を導入で扱うことも可能である。

その場合は、右のような子どもが親しんでいる短歌を選ぶのが適している。

春過而	夏来良之	白妙能	衣乾有	天之香来山	石激	垂見之上乃	左和良妣乃	毛要出春尔	成来鴨
〔万葉集 卷第一〕	二二八				〔万葉集 卷第八〕	一四一八			

③ 第3次 語り部になろう 21世紀の語り部

～『平家物語』・「冒頭」「扇の的」「宇治川の先陣」～

口承文学の代表として、『平家物語』の音声に出会わせた。平曲、朗読、群読という異なった語りを聞かせ、「語り」に興味を持たせるようにした。実際に平曲を聞いたことで、もともとは琵琶法師によって語り継がれてきた口承文学であることを実感できたようである。また『竹取物語』と『平家物語』の絵巻物の絵を比べることによって、緊迫感の違いに気づかせた。そして、その緊迫感が語り口に表れていることにも気づかせた。

合戦のイメージからか、特に男子が自分たちでも『平家物語』を語ってみたいという意欲を見せた。そこで、保護者に向けて「千年の昔の語り部」として『平家物語』を語るという終末の活動を設定し、群読

させることにした。これは学習経験のない群読に興味を持つ子どもが多かったことと、一人で全部を語るのは負担感が大きいと判断したためである。

テキストとしては中学校教科書を参考にし、下段に口語訳をつけた。まずは「扇的」を共通学習材として、学級全員で群読の方法を学習した。本単元では三つの観点を与えた。

○イメージの明確化と共有

登場人物の人物像（年齢、風貌、性格など）

場面の様子

聞き手に伝えたい思い

○配役（誰がどこを語るか）

○表現の工夫

人数をかえる、男女の声質を生かす、言葉を重ねたり繰り返したりする

効果音や簡単な動作をつける など

子どもたちは次のような話し合いを通して、自らの読みを作り上げていった。

- ・平家方は関東武士だから男子の声、源氏方は西側の貴族だから女子の声がいいよ。
- ・「沖には平家…」「陸には源氏…」のところは両者向かい合って、一步相手の方に詰め寄って言った方が迫力が出るよ。
- ・「よつびいてひやうど放つ」のところは、扇までの距離感をもっと出した方がいい。

群読発表会に向けて準備に取りかかった。『扇的』のほかに、『宇治川の先陣』『一ノ谷の合戦』『敦盛の最期』から群読したいものを選択させ、選択した者でグループを作ることにしたが、半数以上の子どもたちが『扇的』を選んだ。その他は『宇治川の先陣』だけであった。『一ノ谷の合戦』と『敦盛の最期』が選択されなかった理由としては、内容が難しかったこと、子どもの興味にはそぐわなかったこと、リズム感や躍動感のある文章の方が群読に向いていたことなどが考えられる。

5～8名でグループを編成した。どのグループも話し合っては声に出し、また話し合うを繰り返す。そのような中で、山場はどこかについて話し合っているグループがあった。一番盛り上げて語る場面を限定するために、古典とはいえ山場を判断しなくてはならないと考えた

のである。既習の文学的文章の物語構造を活用しているのである。

リハーサルでは、それぞれが語りの観点を自分のものとしていたため、「声が大きくて良かった」といった類の表面的な評価の言葉はなく、「大串次郎重親の飄々とした人物像が語り口からもよく伝わってきた」など、内容に関わる具体的な発言が続いた。このようにして群読発表会本番を迎えた。

（４）単元「〇〇なもの」 ５・６年生

～「おかしい」と「をかし」の違いから、『枕草子』の冒頭と出会い、それを真似て「自分流・枕草子」を書く。さらに、「ものづくし」の段に触れ、「〇〇なもの（こと）」のエッセイを書く単元～

◆単元のねらい

- ・音読や暗唱をすることによって、歴史的仮名遣いや古典の語句に慣れ親しみ、内容理解を深める。
- ・翻作することを通して、昔の人のものの見方、考え方に触れる。

◆単元の流れ

第１次 「枕草子」の冒頭に出会い、翻作する。（５年生）

- ①「おかしい」という言葉の意味を考えることから、「枕草子」に興味をもつ。
 - ・「おかしい」を中心語にマッピングしながら、意味を整理する。
 - ・国語辞典を引き、文語の「をかし」に気づかせる。
- ②「枕草子」第一段を読む。
 - ・「春」と「夏」を音読し、歴史的仮名遣いを正しく理解させ、書かれている内容を確認する。
 - ・続きを予想させた後、「秋」と「冬」を読み、内容をとらえさせる。
- ③「自分流・枕草子」を翻作する。
 - ・「枕草子」風となるための、文体の特徴を指摘させる。
 - ・自分なりの「季節を象徴するもの」を見つけ、指示した文体の条件（「夏は〇〇」で始まること、「をかし」を使うこと）を満たすようにして書かせる。

作品を発表し、交流する。

◆学習の実際

まず、「おかしい」という言葉を中心語として言葉マップを作らせた。すると、「おもしろい」といったプラスの意味と、「変だ」「調子が悪い」といったマイナスの意味をあわせ持つことに気づいた。

国語辞典を引かせて確かめたところ、「〔文〕をかし」が語源であること、「『をかし』の文学『枕草子』」とあることを見つけた。

はじめは「枕草子」の冒頭部分の夏まで出会わせた。一度に冬まで与えなかったのは、次の理由による。

- ・冬までを一時に与えるには、文章量が多いため。
- ・夏以降を予想させ、内容や書きぶり（文体の特徴など）に気づかせ、翻作に生かすため。
- ・「自分だったら」という思いをもたせ、翻作する際の想の耕しにつなげるため。

春と夏を与え、口語訳と照らしながら内容の大体をとらえ、音読をさせた。想定通り、子どもたちは「まだ『秋』があるでしょう」と言い、次のように予想した。

- ・「秋は〇〇」で始まる。
- ・「〇〇」の部分は、きっと時間帯を表す言葉がくるよ。
- ・秋だったら、夜がいいなあ。涼しくて気持ちがいいもの。
- ・ぼくだったら、「秋は、スポーツ」と言いたいところだけど。
- ・「をかし」という言葉が使われているよね。それで、秋のどんなところがいいか語るんだよ。
- ・「～もをかし」や「さらなり」もあるんじゃないの。

秋と冬を提示し、さらに以下の点にも気づいた。

- ・「いと」という言葉が多用されていること
- ・色をイメージさせる言葉が多いこと
- ・「をかし」に加え、「つきづきし」「わろし」といった内容も述べられていること
- ・数を重ねる表現が使われていること

これらはそのまま、次の「自分流・枕草子」を翻作するときの手立てとなる。

「枕草子風」に書くためには、どのような書きぶりを真似したらよいか確かめた後、翻作させた。ただし、条件が多すぎると翻作のハードルが上がってしまうため、次の二つだけを条件とした。

- ・「夏は〇〇」で始まり、体言止めとすること

- ・「をかし」は使用すること

このようにしてできあがった作品の一部を紹介する。

夏は花火。
大勢で見るのはさらなり。独りで見るもまた静けさに花火の音がなるのがをかし。夜の闇に、色あざやかな花火がみえるのは、いとつきづきし。

夏は野球。
テレビで見るもをかし。生で見るもいとをかし。また、三つ四つ二つなどホットドッグを食べるのいとうまし。熱心に応援するのもをかし。夜になりて大人ビール飲んでよっぱらうのわろし。

夕暮れ時、赤い太陽が山の端にしずむのをおしむように鳴くのはあはれなり。
また、だんだんセミが鳴きやんでゆくもをかし。されど、セミが鳴きやみ何の声もしない時はさみしげでわろし。

※各季節に使用されている言葉

夏……～もをかし
秋……あはれ、～いとをかし
冬……つきづきし、わろし

第2次 「ものづくし」を読み、清少納言のものの見方や考え方に触れ、翻作する。(6年生)

3. 小学校における「伝統的な言語文化」の授業のあり方

ここでは実践の一部しか述べることはできなかったが、小学校における「伝統的な言語文化」の授業作りについて、実践を重ねる中で明らかになってきたことを述べてまとめとする。

(1) 5つのねらい

学習指導要領の指導内容をふまえ、5つのねらいに整理し直してみた。

- ①日本語特有のリズムや語感を体感させるため。
- ②言語文化（語り継がれたりよみ継がれたりしていること）に気づかせるため。
- ③ことばを通して日本の文化に気づかせたり、教えたりするため。

④既存の知識や言語経験に照らしたりつなげたりして、内容を理解する面白さを味わわせるため。

⑤教養としての知識を身につけさせるため。

子どもたちはリズムのよい詩や文章に出会うと何度も音読し、自然と日本語のリズムや語感を体感してゆく。①のねらいに適した音読や暗唱を中心とした学習材が多いのは、そのためである。

しかし、現状は内容理解を伴わない音読や暗唱に傾斜し過ぎている。小学校での「伝統的な言語文化」の授業は音読や暗唱をさせておけばよいという風潮が否めない。②以下のねらいに合った学習材の充実を図り、よりバランスの良い学習材と指導法が開発されるべきである。

特に、小学校段階では④をねらいとした古典学習が必要である。「昔の言葉だけれど、内容は大体わかる」と子どもに感じさせることが、文化の伝承性に気づかせることにつながる。

(2) 既存の知識につなげながら理解することのできる学習材の開発

「昔の言葉だけれど、内容は大体わかる」と子どもに感じさせるためには、以下の思考を子どもにさせるように仕組むことが効果的である。

- ・ 文脈や前後の関係から考える
- ・ 口語で似た言葉を探して当てはめてみる
- ・ 既習の知識や言語経験と照らしたりつなげたりして考える
- ・ 漢字の意味から考える など

具体的には、思考やねらいに合わせ、例えば学習材の提示方法にしても、音声だけ、文字だけ、両方一緒にといったことの違いを吟味するなど、手立てや指導法の工夫が必要である。

(3) 学習者である小学生の特性をつかむ

授業を作る上では、学習者である小学生は古典に対してどのような特性をもっているかのとらえが重要となる。

顕著な特性として、次の3つが挙げられる。

①「古典」に対する抵抗が少なく、興味を喚起しやすい。

- ・ 小学生は「古典」というジャンル意識をもっていない。
- ・ 分からない言葉や言い回しがあっても、分かる部分をつなぎ合わせて考え内容を理解する能力に優れている。

②音読や暗唱など、声に出すことを好む。

- ・意味の理解に関わらず声に出すことを楽しみ、リズムや語感を体得する。
- ・気に入った言葉やフレーズを飽きることなく繰り返す。

③語いの変化。

- ・季節のことばに出会うことが少ない。
- ・家族の形態や生活様式の変化に伴い、「知らないことば」の質が変わってきた。

(4) 今後の課題

小学校における「伝統的な言語文化」の授業は始まったばかりである。そのため、「竹取物語」「枕草子」「平家物語」の冒頭、「論語」など、いずれの学習材もこれまで中学校で扱ってきたものばかりである。たとえ学習材が同じであっても、ねらいや扱い方、活動などは中学校と違うはずである。

今後は、発達段階に応じた学習材や指導法について、特に中学校との差異や系統性が検討されなくてはならない。

歌舞伎鑑賞教室に参加して

六月に行われた歌舞伎鑑賞教室に参加し、初めて歌舞伎というものを見た。そこで歌舞伎は面白いということに気が付いたので、七月に開催された歌舞伎鑑賞教室にも参加させて頂いた。『毛抜』という演目は耳にしたことがなかったのでもんなものなのか全く想像が出来なかつたのだが、とても楽しんで鑑賞することが出来た。全体的にユーモアが溢れた演目で、笑いを誘う場面も多々あり、面白い内容だと感じた。『毛抜』のあらすじは大まかにいうと、髪が逆立つという姫の奇病の原因を文屋豊秀の家来である弾正が探り、真相を暴くといったものである。姫の髪が逆立つといった奇病もユニークで面白いし、主人公弾正の性格も面白かった。事件を解決出来るほどの知恵を持っているにも関わらず、秦秀太郎にたわむれかかったり、お茶を持ってきた腰元に言い寄ったりする。弾正は嫌味がなく、愛嬌のあるキャラクターだと感じた。そんな弾正だからか、幕引きは気持ちが良くらいスムーズに進み、姫の奇病の正体を明かすシーンから黒幕をやっつけるシーンまで流れるように物語が進んでいった。弾正による最後の見得は物語を閉めるに相応しくばっちり決まっただけで格好良いと思った。(日文三年 小川 亜希子)